

2

データ分析

- (1) 漢字テストの結果
- (2) 日ごろの生活について
- (3) 勉強の様子について
- (4) 勉強についての考え



漢字テストについて

●実施方法について

学校の国語の授業で使用している教科書を限定したうえで、

- ・中1生に対しては、当該学年で履修する漢字
- ・中2生に対しては、中1生で履修した漢字
- ・中3生に対しては、中2生で履修した漢字

をそれぞれ100問程度、計7種類のテストを用意して実施した^{*1}（なお、漢字テストの内容については、p.30からの調査票見本を参照されたい。また、テスト作成の際には、ランダムで漢字を選んでいるため、テストの種類ごとに大きな難易度の差はないものと想定される）。したがって、中1生においては、未履修の漢字が含まれている^{*2}。なお、当該教科書において中1生・中2生で履修する漢字は650字である^{*3}。

※1) 漢字テストの種類とテストの結果について

7種類ある漢字テストで出題される漢字の重複を避けるため、問題の総数は86問から100問の間に設定した。したがって、正答数だけから中学生の漢字の力を比較することはできない。そこで、すべての中学生について「100点換算したときの漢字テストの得点率」を用いることによって、分析を進めることにする。なお、本報告書においては、この100点換算したときの漢字テストの得点率を、「漢字テストの得点」、または、単に「得点」と表記することにする。「平均点」なども、この「得点」より算出したものである。

※2) 学年別にみた漢字テストの得点分布と「漢字力」の定義について

今回の調査で実施した漢字テストでは、履修時期と実施時期との関係から、未履修の漢字もテストに含まれている中1生の得点をもっとも低くなっている。そこで、漢字テストの得点に与える学年の影響を取り除くために、各学年ごとの得点分布にしたがって、漢字テストの得点が低いグループを「下位層」、中ぐらいのグループを「中位層」、高いグループを「上位層」の3つのグループに分けた。なお、本報告書では、このような漢字テストの得点によって分けられたグループを「漢字力」別に分けたグループと呼び、「漢字力上位層」「漢字力別」などと表記することにする。また、サンプル数の内訳は、下の表の通りである。

※3) 漢字の習得状況は、調査実施時期などにより異なるものと考えられる。そのため、それぞれの漢字の正答率は、中学生にとっての習得の際の難易度の目安と考えていただければ幸いである。

■「漢字力」別（下位層、中位層、上位層）の内訳

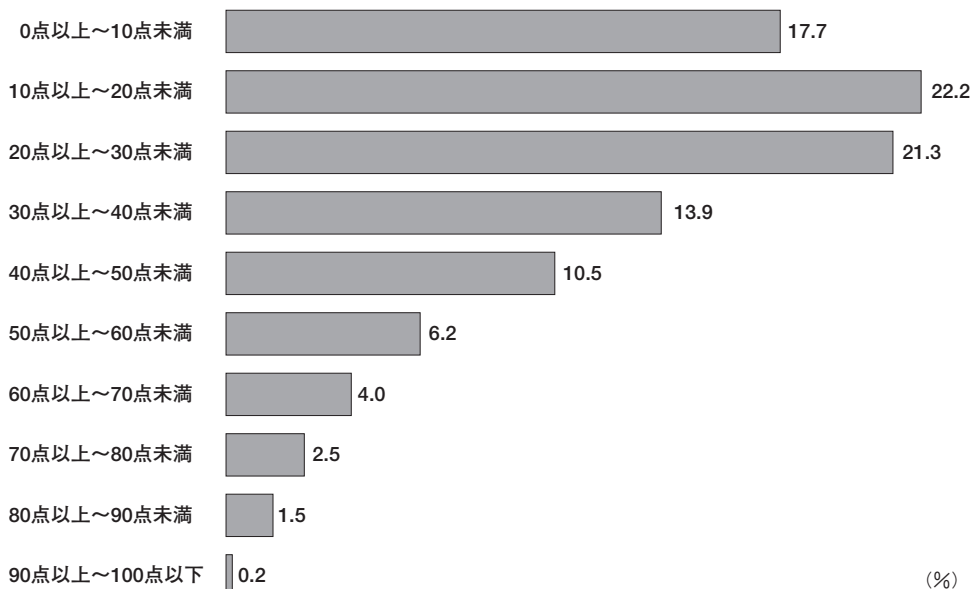
学年	中1生			中2生			中3生		
	得点	度数	割合(%)	得点	度数	割合(%)	得点	度数	割合(%)
下位層	0点以上～ 15点未満	273	35.2	0点以上～ 25点未満	304	37.8	0点以上～ 15点未満	273	36.1
中位層	15点以上～ 30点未満	281	36.3	25点以上～ 45点未満	242	30.1	15点以上～ 30点未満	221	29.2
上位層	30点以上～ 100点以下	221	28.5	45点以上～ 100点以下	258	32.1	30点以上～ 100点以下	262	34.7
計		775	100.0		804	100.0		756	100.0

(1) 漢字テストの結果

① 漢字テストの得点分布

**漢字テストの平均点は、27.8点。
得点分布をみると、「10点以上～20点未満」(22.2%)が
ピークとなっている。**

■ 図1-1-1 漢字テストの得点分布



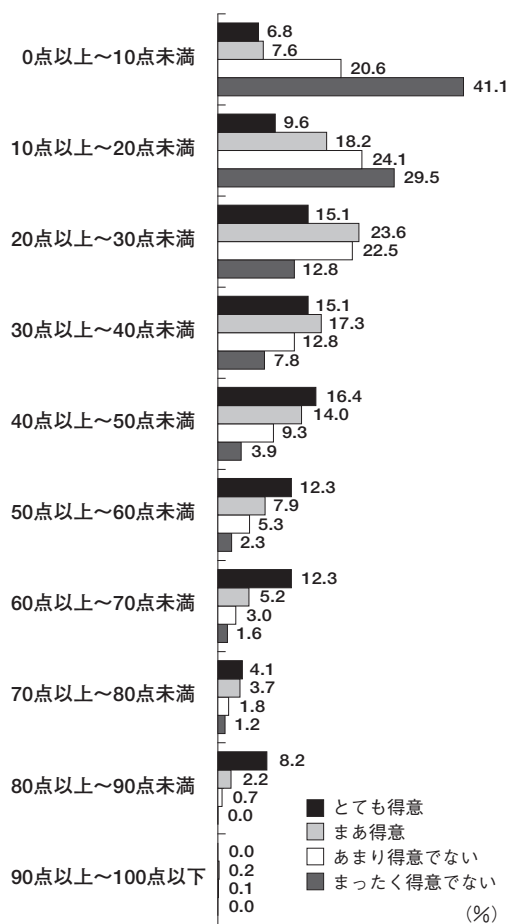
漢字テストについて、10点刻みの得点分布を示したものが、図1-1-1である。これより、テストの得点は「10点以上～20点未満」でピークとなっていることがわかる。また、得点が高くなるにつれて比率が大きく減少している。なお、全体の平均点は、27.8点（ $n = 2335$ ）であった。中学生配当漢字にもかかわらず、得点がこのような結果となる背景には、漢字の書きではなく読みを優先する現行の学習指導要領などが影響していると考えられる。詳細については、「1. 調査の解説」を参照されたい。

②漢字テストの得点と国語の得意度の関係

**国語が得意な子ほど、漢字テストの得点が高い。
しかし、国語が「とても得意」と回答した中学生でも、
平均点は42.8点となっており、5割を切っている。**

■ 図1-2-1 漢字テストの得点分布(国語の得意度別)

■ 表1-2-2 漢字テストの平均点(国語の得意度別)



国語の得意度	度数	標準偏差	平均点
とても得意	73	0.22	42.8
まあ得意	863	0.19	33.4
あまり得意でない	1027	0.18	25.0
まったく得意でない	258	0.16	16.8
合計	2221	0.19	27.9

漢字テストの結果は、その中学生が国語が得意かどうかということと関連しているのだろうか。図1-2-1は、国語の得意度別に中学生をグループ分けし、漢字テストの得点分布を示したものである（「国語の得意度」は、中学生本人に国語が得意かどうかをたずねた回答結果を利用。詳細についてはp.26を参照）。これより、国語が得意と感じているグループほど、ピークとなる得点が高くなっていることがわかる。また、表1-2-2は、国語の得意度別に、度数、標準偏差、平均点を示した表である。このうち、平均点をみると、国語が得意と感じているグループほど、漢字テストの平均点が高くなっていることがわかる。しかし、国語が「とても得意」と回答したグループでも、平均点は42.8点となっており、5割を切っている。

③漢字テストの得点の学校間比較

漢字テストの得点分布は学校によっても異なる。
平均点で見ると、最大で約10点の差がある。

■図1-3-1 漢字テストの得点分布（学校別）

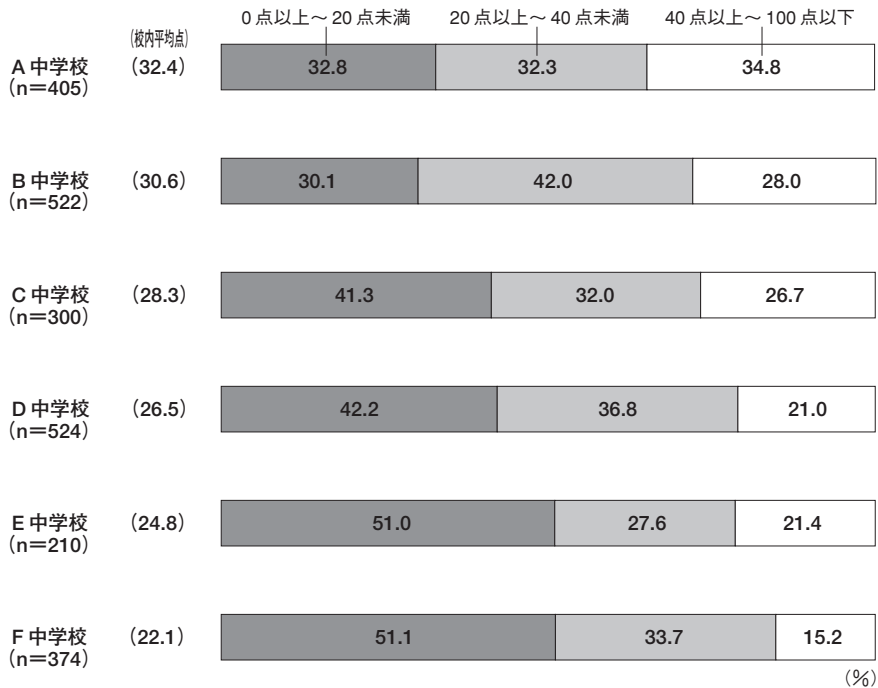


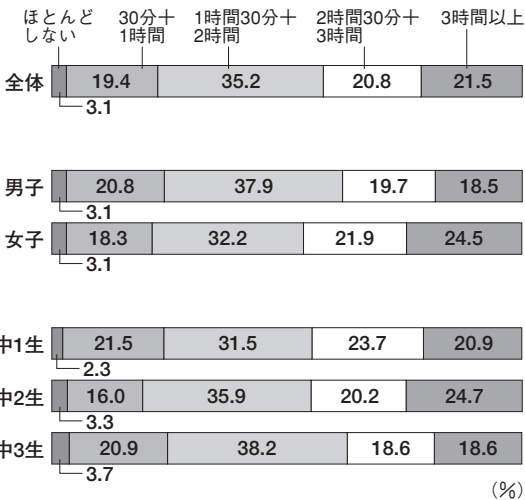
図1-3-1は、調査対象となった6つの中学校において、学校ごとの漢字テストの結果を「0点以上～20点未満」「20点以上～40点未満」「40点以上～100点以下」の3つに分けて、それぞれの割合を表したものである。また、それぞれの学校の校内平均点を、学校名の右のカッコ内に示している。まず、「0点以上～20点未満」の割合に注目してみよう。A中学校・B中学校では約3割であるのに対し、C中学校・D中学校では約4割、E中学校・F中学校では約5割と半数を超えている。次に、それぞれの学校の校内平均点をみてみると、もっとも平均点の高かったA中学校ともっとも低かったF中学校では、10.3点の差がついていることがわかる。

(2) 日ごりの生活について

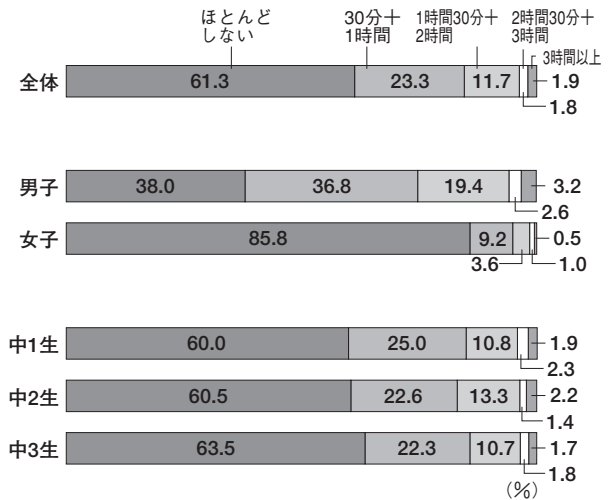
①平日の時間の過ごし方

**テレビの視聴時間が「3時間以上」という中学生は、約2割。
テレビゲームをする時間、親と話をする時間は性差が大きい。
約4人に1人が家で勉強を「ほとんどしない」と回答している。**

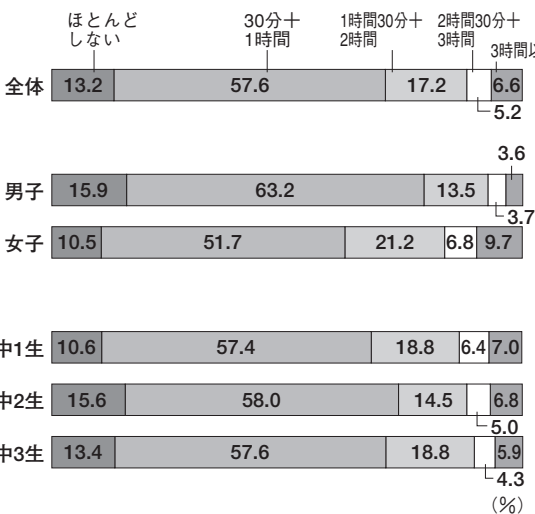
■図2-1-1 テレビを見る時間（全体/性別/学年別）



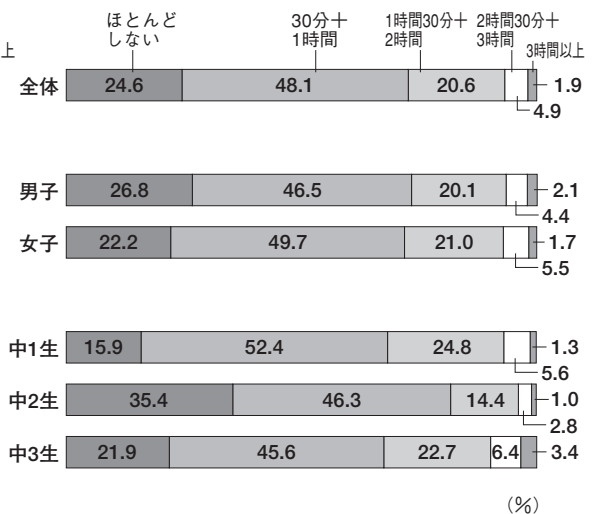
■図2-1-2 テレビゲームをする時間（全体/性別/学年別）



■図2-1-3 親と話をする時間（全体/性別/学年別）



■図2-1-4 家で勉強する時間（全体/性別/学年別）

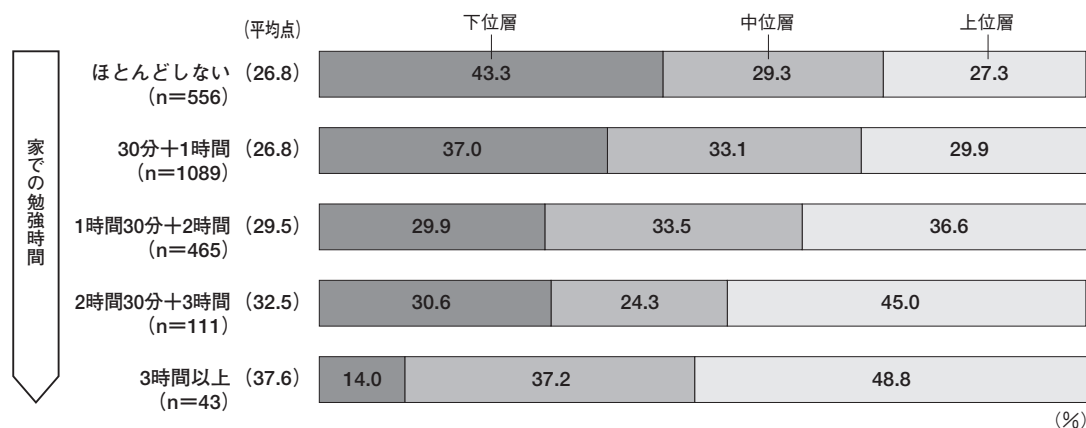


テレビを「3時間以上」見る割合は、性や学年を問わず、約2割前後となっている（図2-1-1）。テレビゲームをする時間は女子よりも男子が長く、親と話をする時間は男子よりも女子が長い（図2-1-2、図2-1-3）。また、勉強時間については、全体では、約4人に1人が「ほとんどしない」と回答しているが、中2生では、35.4%となっている（図2-1-4）。

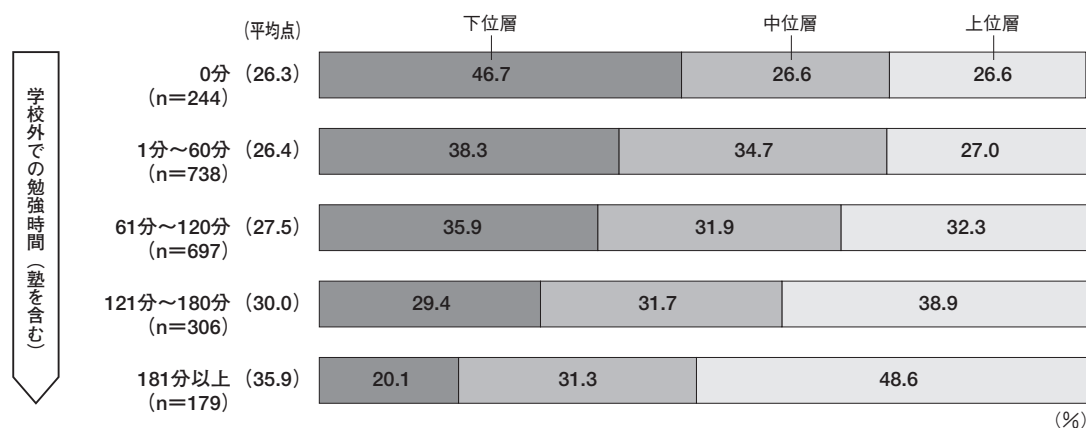
②学校外での勉強時間と漢字テストの得点の関係

**学校外での勉強時間が長いほど、漢字テストの得点が高い。
学校外での勉強時間が1時間を超えるあたりから、
漢字テストの平均点が上昇している。**

■図2-2-1 家での勉強時間と漢字テストの得点の関係



■図2-2-2 学校外での勉強時間（塾を含む）と漢字テストの得点の関係



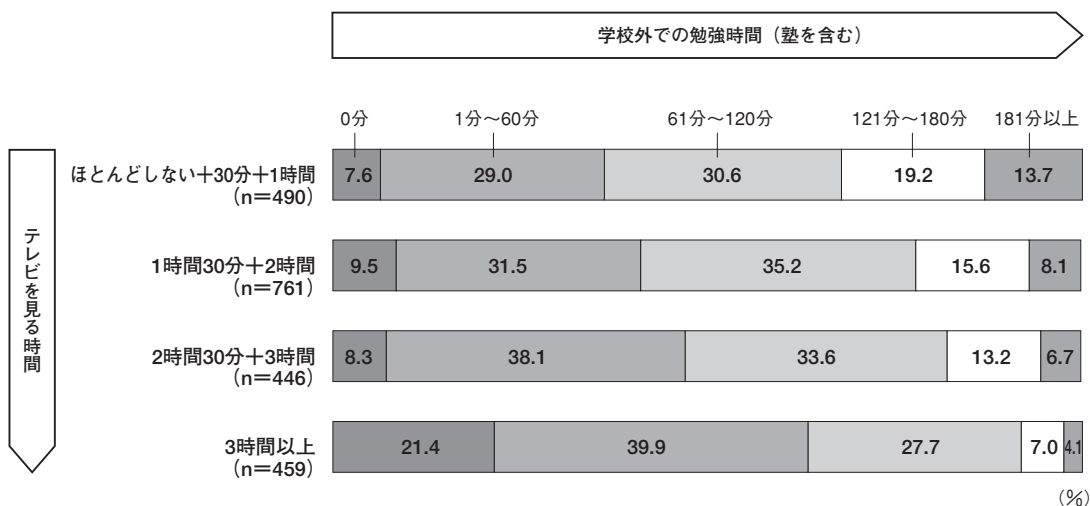
*「学校外での勉強時間（塾を含む）」は、「週あたりの通塾日数」と「塾1回あたりの勉強時間」から「1日あたりの平均塾勉強時間」を算出し、「家での勉強時間」との和をとったもの。

図2-2-1は、中学生の家での勉強時間と漢字テストの得点の関係、図2-2-2は、塾を含めた学校外での勉強時間と漢字テストの得点の関係を示している。まず、漢字テストの得点が高い「上位層」の割合に注目してみると、家での勉強時間、塾を含めた学校外での勉強時間が長くなるほど、得点上位層の割合も増えていることがわかる。また、各勉強時間ごとの平均点を見てみると、家での勉強時間が「ほとんどしない」「30分+1時間」、塾を含めた学校外での勉強時間が「0分」「1分~60分」ではほとんど変わらないものの、勉強時間が1時間を超えると、徐々に平均点が高くなっていることがわかる。

③テレビを見る時間と学校外での勉強時間の関係

テレビを見る時間が長いほど、学校外での勉強時間は短くなる。
とくに視聴時間が3時間を超えると、「0分」の割合が急増する。

■図2-3-1 テレビを見る時間と学校外での勉強時間の関係



*「学校外での勉強時間（塾を含む）」は、「週あたりの通塾日数」と「塾1回あたりの勉強時間」から「1日あたりの平均塾勉強時間」を算出し、「家での勉強時間」との和をとったもの。

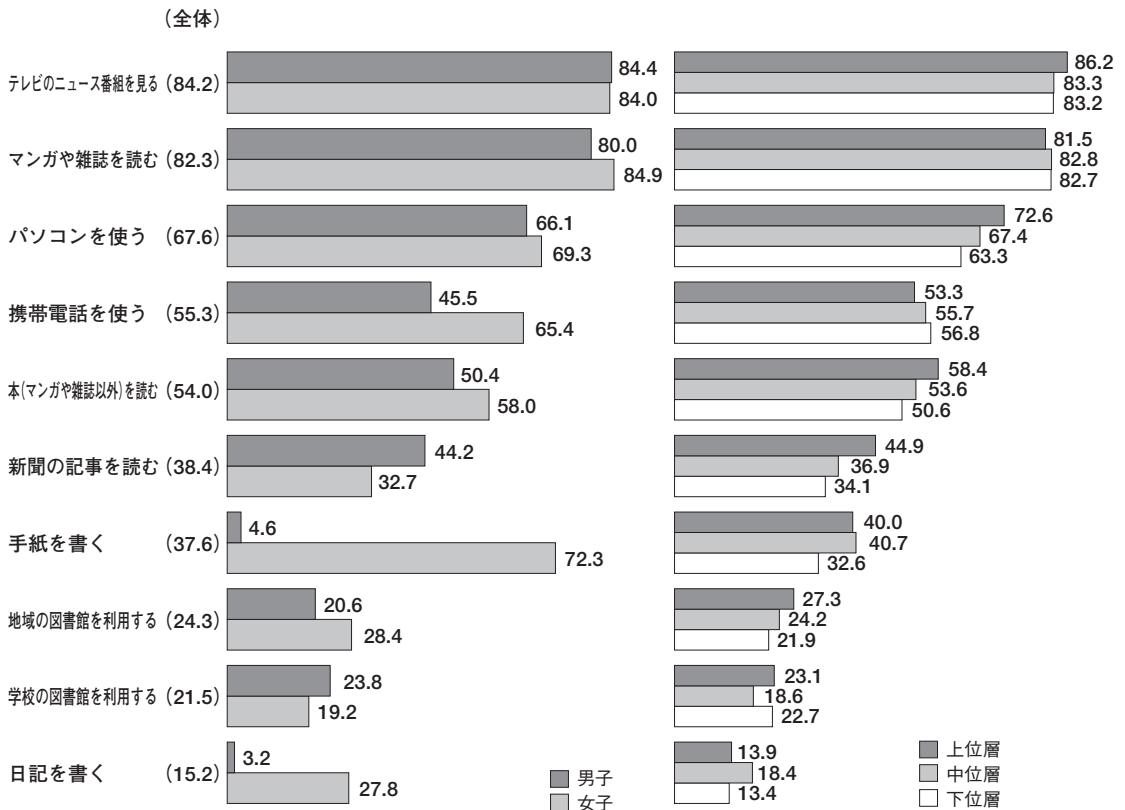
前頁で、学校外での勉強時間が長いほど漢字テストの得点が高いことがわかった。では、学校外での勉強時間は、他の家での生活時間とどのような関係があるのだろうか。テレビを見る時間と学校外での勉強時間の関係を見てみると、テレビの視聴時間が長くなるほど勉強時間が短くなっている様子がわかる（図2-3-1）。また、テレビを見る時間が「3時間以上」になると、勉強時間が「0分」という割合が2割を超える。

④ふだんの生活でよくすること

**手紙、日記などを書くのは男子よりも女子に多い。
また、漢字力上位層ほど、パソコンを使う、
本や新聞を読む割合が高い。**

■ 図2-4-1 ふだんの生活でよくすること(性別)

■ 図2-4-2 ふだんの生活でよくすること(漢字力別)



*「よくする」と「ときどきする」の合計 (%)

*「よくする」と「ときどきする」の合計 (%)

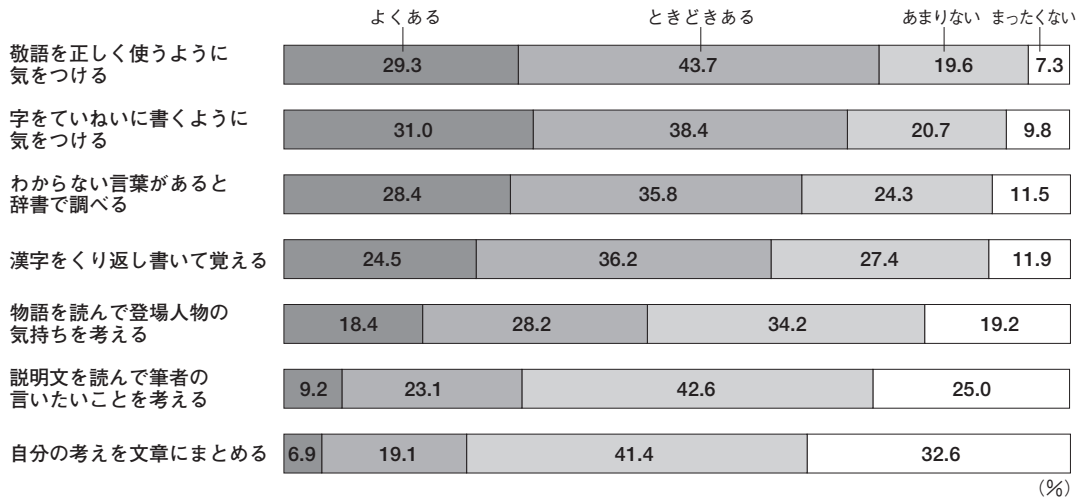
図2-4-1、図2-4-2は、それぞれ、ふだんの生活でよくすることをたずねた質問の回答を、性別、漢字力別に集計した結果を示している。テレビ、マンガ、パソコン、携帯電話にかかわる事柄が上位を占めており、さまざまなメディアが中学生の生活に浸透している様子がうかがえる。まず、性差に注目してみると、「手紙を書く」「日記を書く」「携帯電話を使う」については、男子よりも女子で「する」「よくする」と「ときどきする」の合計、以下同様)という割合が高くなっている。一方、男子では、「新聞の記事を読む」で「する」の割合が高い。次に、漢字力上位層ほど、「パソコンを使う」「本(マンガや雑誌以外)を読む」「新聞の記事を読む」「地域の図書館を利用する」などの割合が高くなっている。

(3) 勉強の様子について

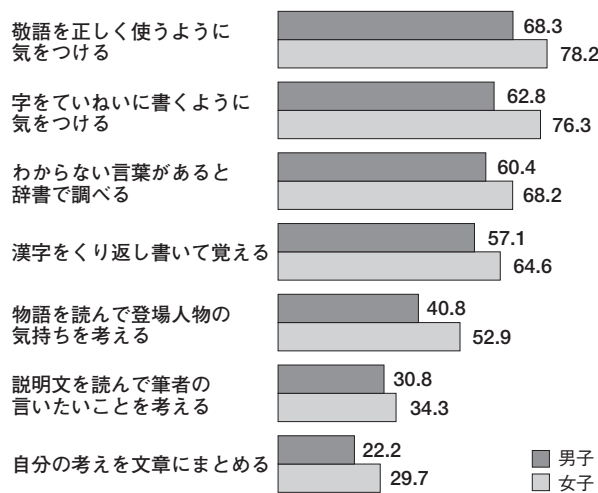
①国語の勉強でよくすること

**「漢字をくり返し書いて覚える」中学生は、約6割。
性別では女子が、漢字力別では上位層が、
国語の学習にかかわるさまざまな事柄に取り組んでいる。**

■図3-1-1 国語の勉強でよくすること

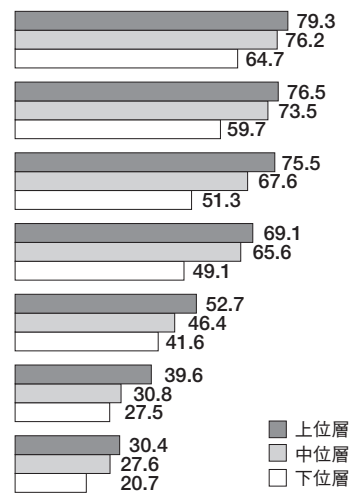


■図3-1-2 国語の勉強でよくすること(性別)



*「よくある」と「ときどきある」の合計(%)

■図3-1-3 国語の勉強でよくすること(漢字力別)



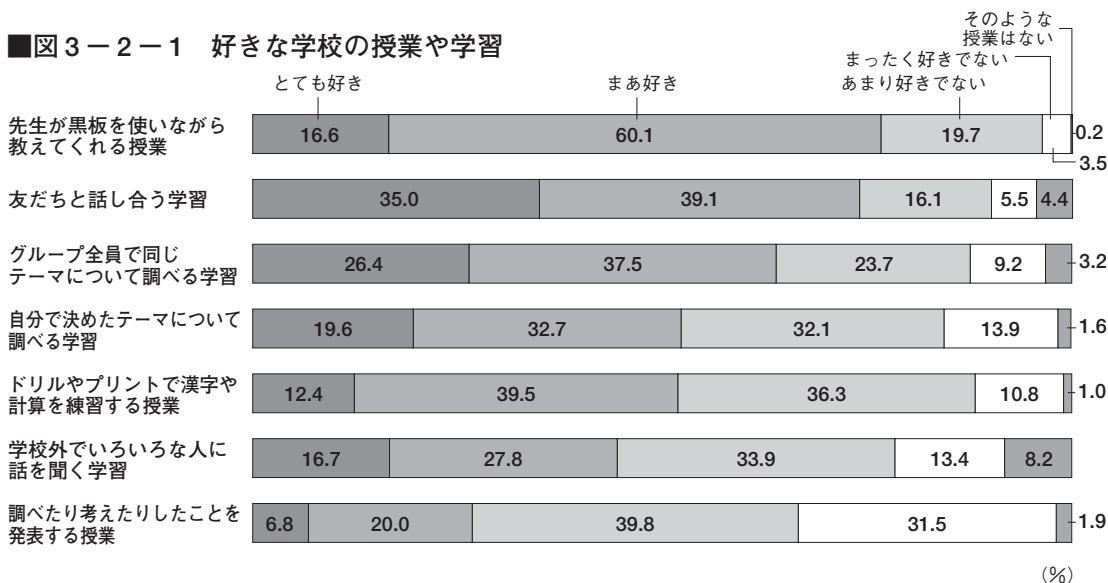
*「よくある」と「ときどきある」の合計(%)

「漢字をくり返し書いて覚える」ことが「ある」(「よくある」と「ときどきある」の合計)という割合は、約6割であった(図3-1-1)。総じて、男子よりも女子の割合が高く(図3-1-2)、また、漢字力上位層ほど、国語の学習にかかわるさまざまな事柄に取り組んでいる様子がわかる(図3-1-3)。

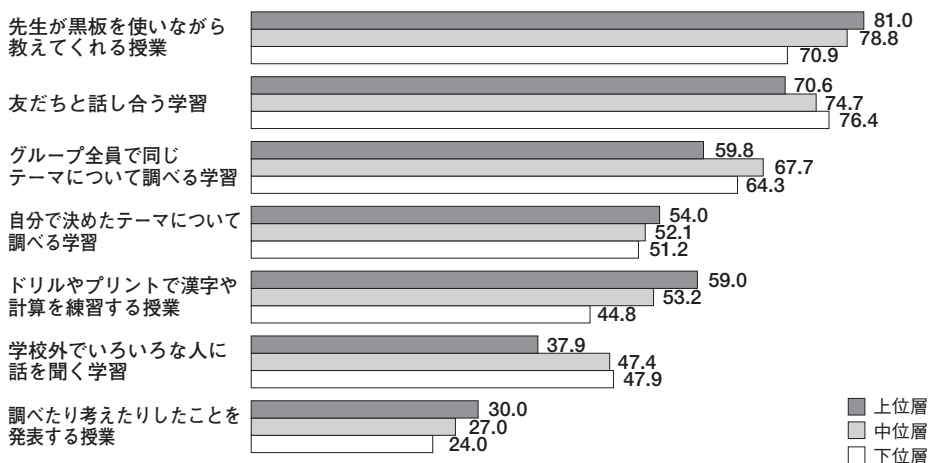
②好きな学校の授業や学習

漢字力上位層ほど「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」や「ドリルやプリントで漢字や計算を練習する授業」などが好き。

■図3-2-1 好きな学校の授業や学習



■図3-2-2 好きな学校の授業や学習（漢字力別）



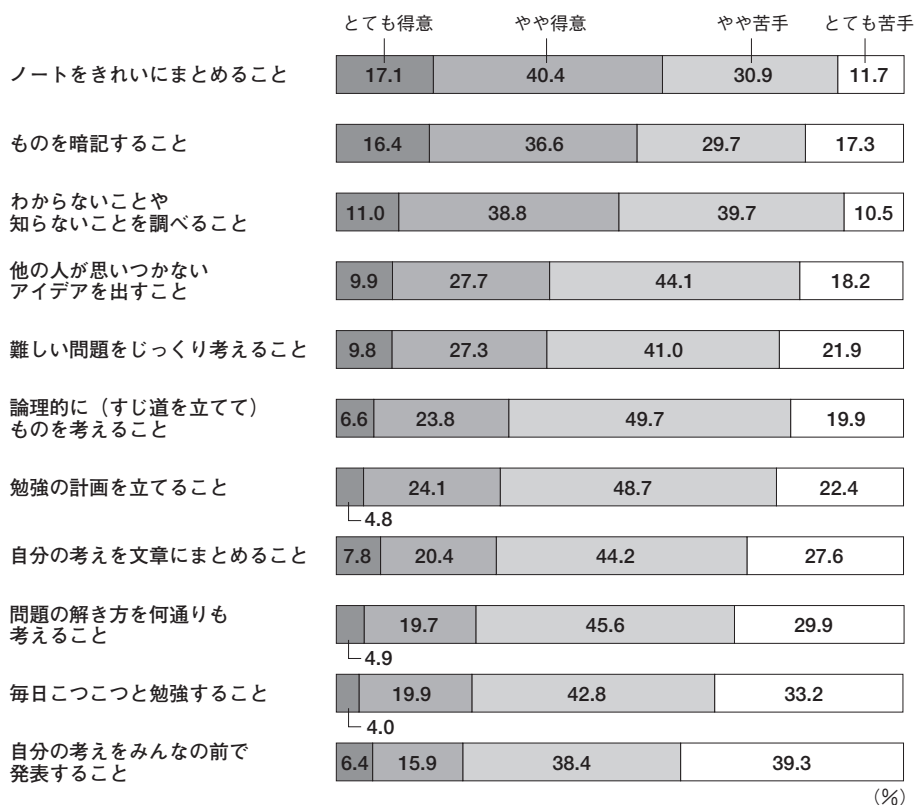
*「とても好き」と「まあ好き」の合計 (%)

「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」「友だちと話し合う学習」では「好き」（「とても好き」と「まあ好き」の合計、以下同様）の割合が7割を超えるが、「学校外でいろいろな人に話を聞く学習」「調べたり考えたりしたことを発表する授業」では5割未満となっている（図3-2-1）。また、漢字力上位層ほど、「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」「ドリルやプリントで漢字や計算を練習する授業」などで「好き」という割合が高くなっているが、「友だちと話し合う学習」や「学校外でいろいろな人に話を聞く学習」では「好き」の割合は低くなっている（図3-2-2）。

③得意な学習

5割以上の中学生が、「ノートをきれいにまとめること」や、「ものを暗記すること」が得意と回答している。
しかし、「毎日コツコツと勉強すること」や「自分の考えをみんなの前で発表すること」などは、とくに苦手である。

■図3-3-1 得意な学習

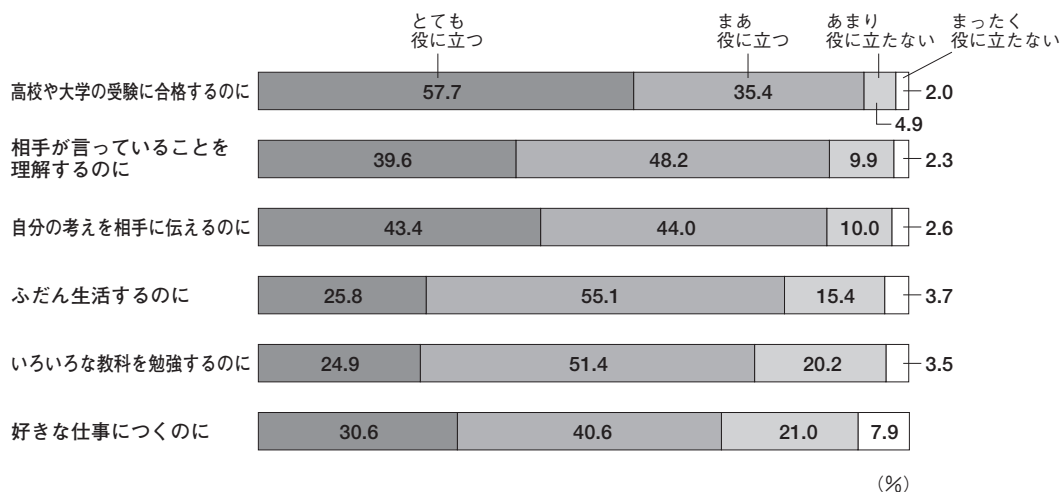


「ノートをきれいにまとめること」「ものを暗記すること」が「得意」（「とても得意」と「やや得意」の合計、以下同様）と回答した割合は5割を超えている。それ以外の項目については、「苦手」（「やや苦手」と「とても苦手」の合計）の割合が5割を超えており、とくに、「自分の考えをみんなの前で発表すること」「毎日コツコツと勉強すること」「問題の解き方を何通りも考えること」などは、「得意」と回答する割合が2割5分未満と低くなっている（図3-3-1）。

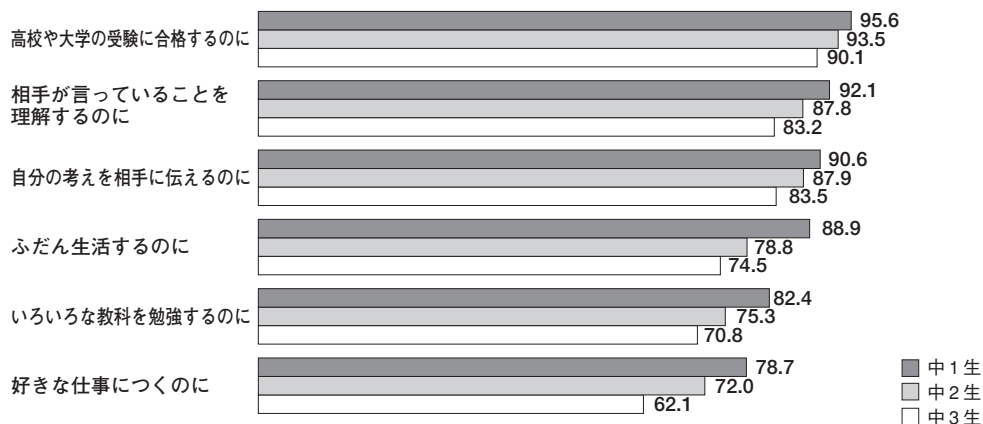
④国語の学習は将来どんなことに役立つか

多くの中学生が、国語の学習が将来役に立つと考えている。
しかし、いずれについても、学年が上がるにつれて役立ち感が低下する。

■図3-4-1 国語の学習は将来どんなことに役立つか



■図3-4-2 国語の学習は将来どんなことに役立つか（学年別）



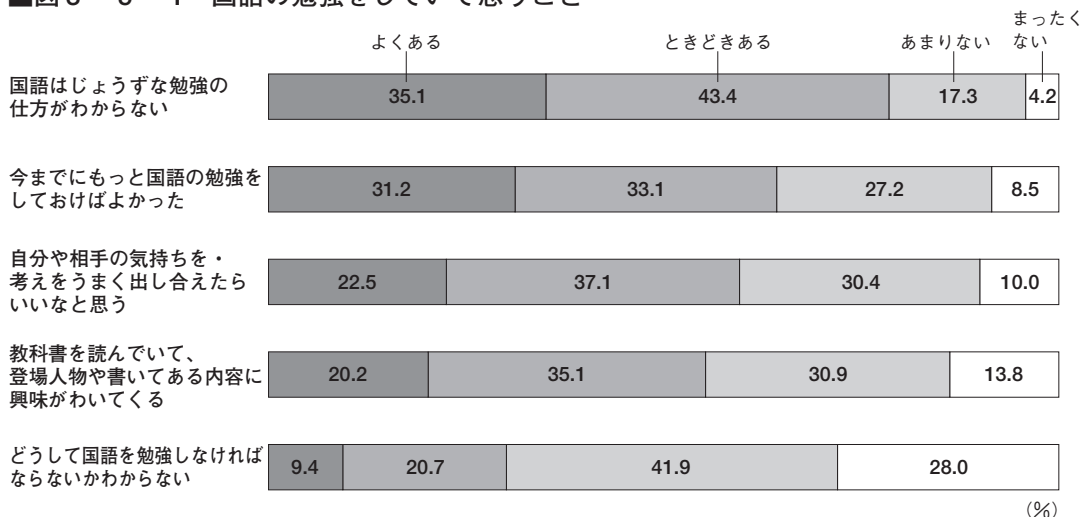
*「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計 (%)

ここでは、国語の学習が、将来、どんなことに役立つかをたずねた質問の回答結果を示している。将来「役に立つ」（「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計、以下同様）と回答した割合をみると、「高校や大学の受験に合格するのに」（93.1%）、「相手が言っていることを理解するのに」（87.8%）、「自分の考えを相手に伝えるのに」（87.4%）、「ふだん生活するのに」（80.9%）、「いろいろな教科を勉強するのに」（76.3%）、「好きな仕事につくのに」（71.2%）となっており、いずれの項目においても、「役に立つ」という回答が7割を超えている（図3-4-1）。しかし、学年が上がるにつれて、すべての項目で将来「役に立つ」という割合が減っている（図3-4-2）。

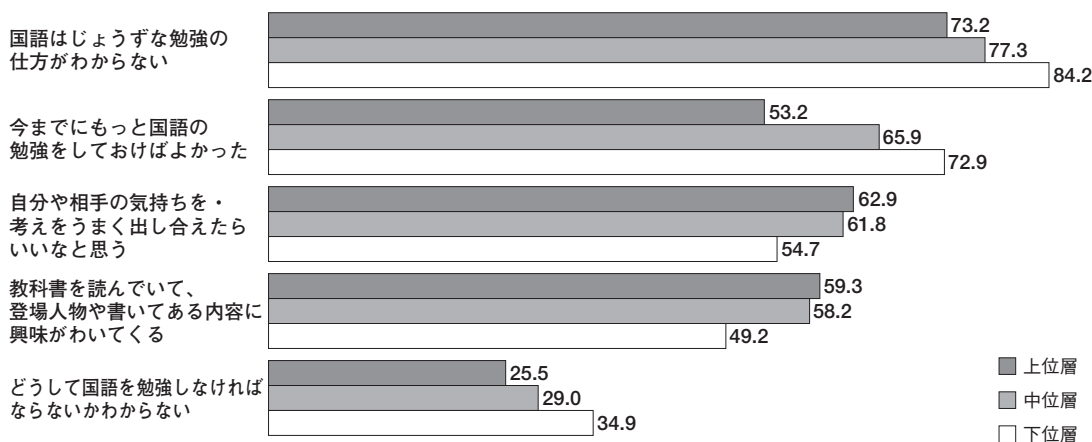
⑤国語の勉強をされていて思うこと

**中学生の約8割が、
「国語はじょうずな勉強の仕方がわからない」と感じている。
とくに、漢字力下位層ほど、強く感じている。**

■図3-5-1 国語の勉強をされていて思うこと



■図3-5-2 国語の勉強をされていて思うこと（漢字力別）



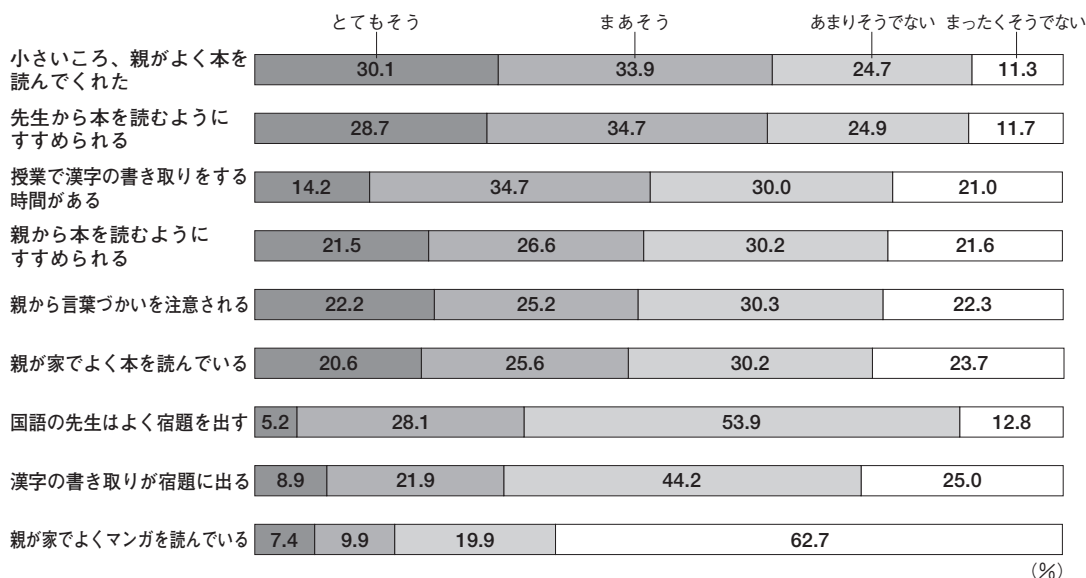
*「よくある」と「ときどきある」の合計 (%)

中学生に、国語の勉強をされていてよく思うことをたずねたところ、「国語はじょうずな勉強の仕方がわからない」という割合（「よくある」と「ときどきある」の合計、以下同様）は78.5%と高くなっており、中学生の約4人のうち3人は、国語の勉強方法がわからないと感じていることがわかる（図3-5-1）。また、漢字力別に回答結果を比較してみると、漢字力下位層ほどその割合が高くなっている。加えて、「今までにもっと国語の勉強をしておけばよかった」「どうして国語を勉強しなければならないかわからない」という割合も、漢字力下位層になるほど、高くなっている（図3-5-2）。

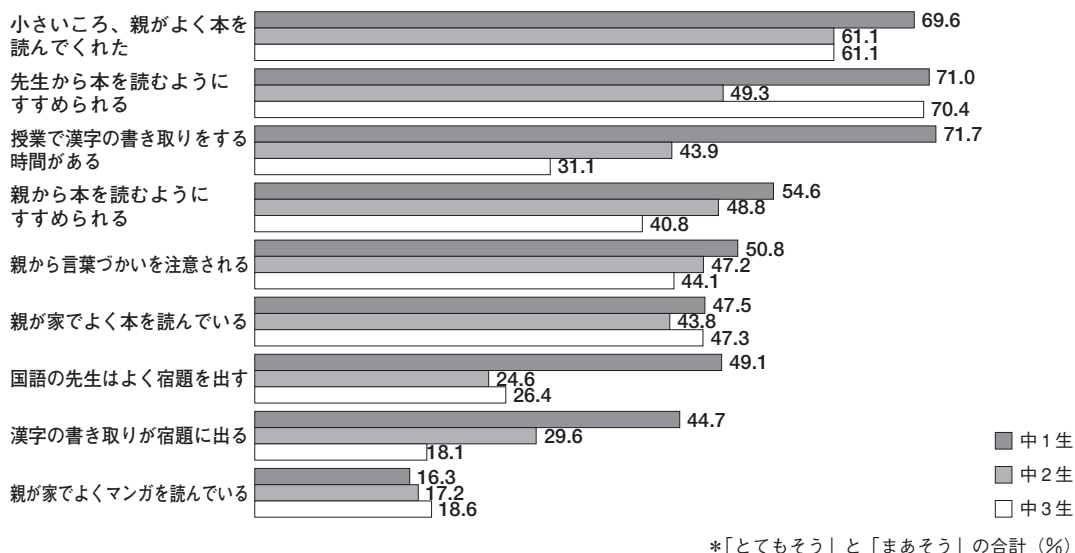
⑥学校の先生や家の人がよくしていること

漢字の書き取りや宿題、先生からの読書のすすめは、学年差が大きい。
漢字力上位層では、親から受けた小さい頃の読み聞かせや読書のすすめ、
親自身の読書姿をみているなどの経験が、各学年を通して豊富。

■図3-6-1 学校の先生や家の人がよくしていること

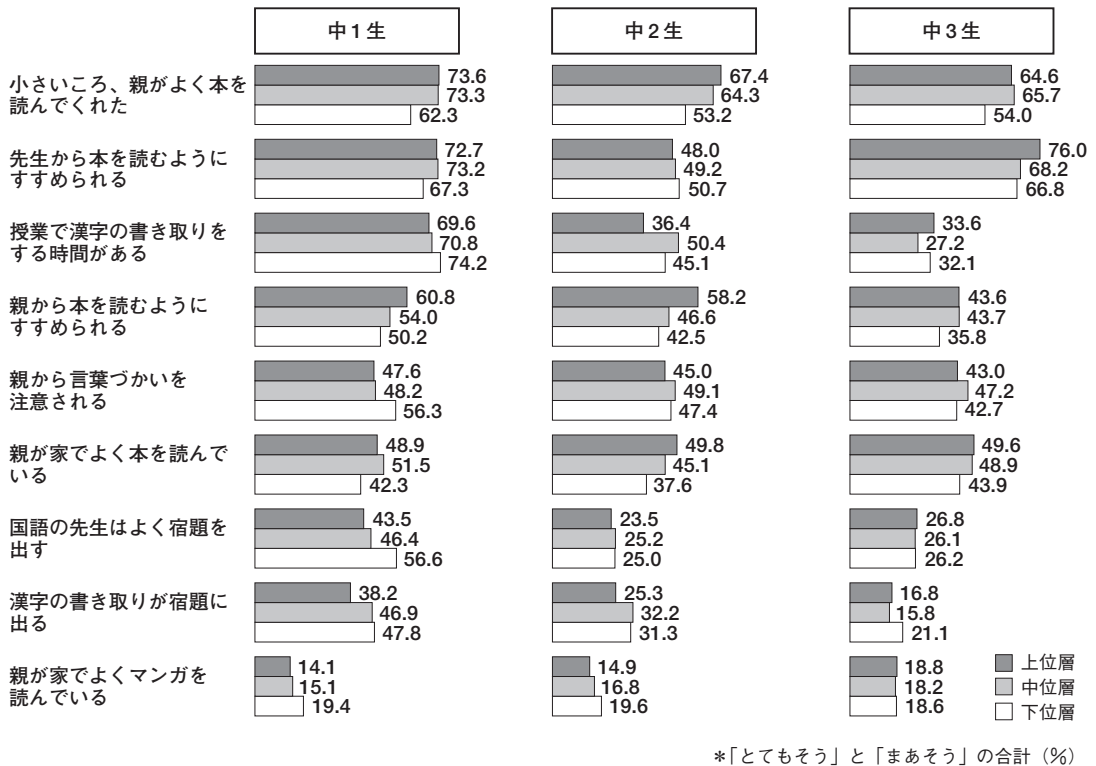
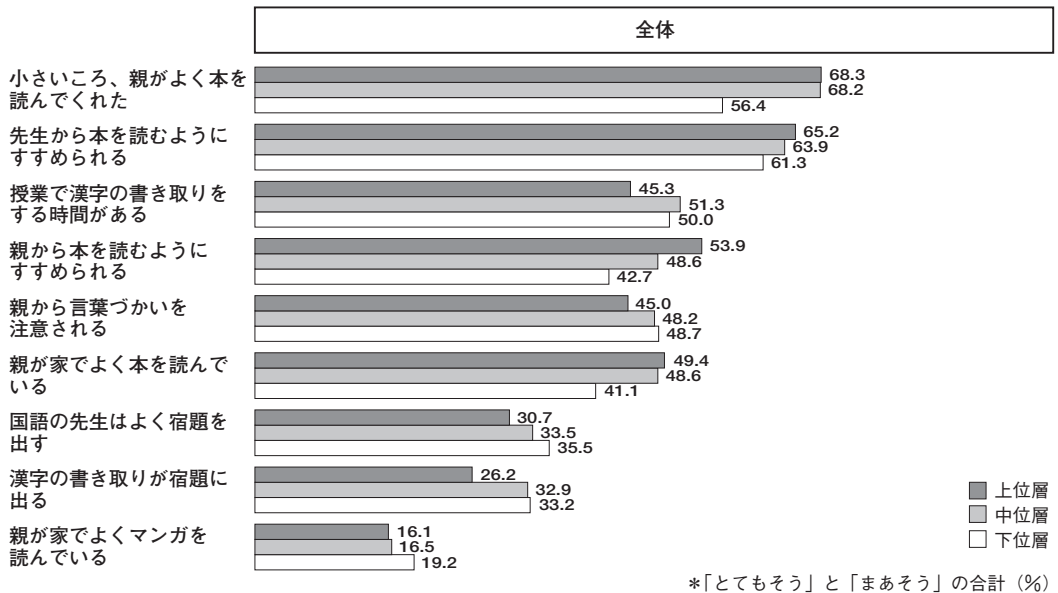


■図3-6-2 学校の先生や家の人がよくしていること（学年別）



学校の先生や家の人がよくしていることについてたずねたところ、「授業で漢字の書き取りをする時間がある」「国語の先生はよく宿題を出す」「漢字の書き取りが宿題に出る」という割合（「とてもそう」と「まあそう」の合計、以下同様）は、とくに中1生で高くなっている。また、「先生から本を読むようにすすめられる」という割合は、とくに中2生で低くなっている（図3-6-2）。（次頁へ続く）

■図3-6-3 学校の先生や家の人がよくしていること（漢字力別/学年別）



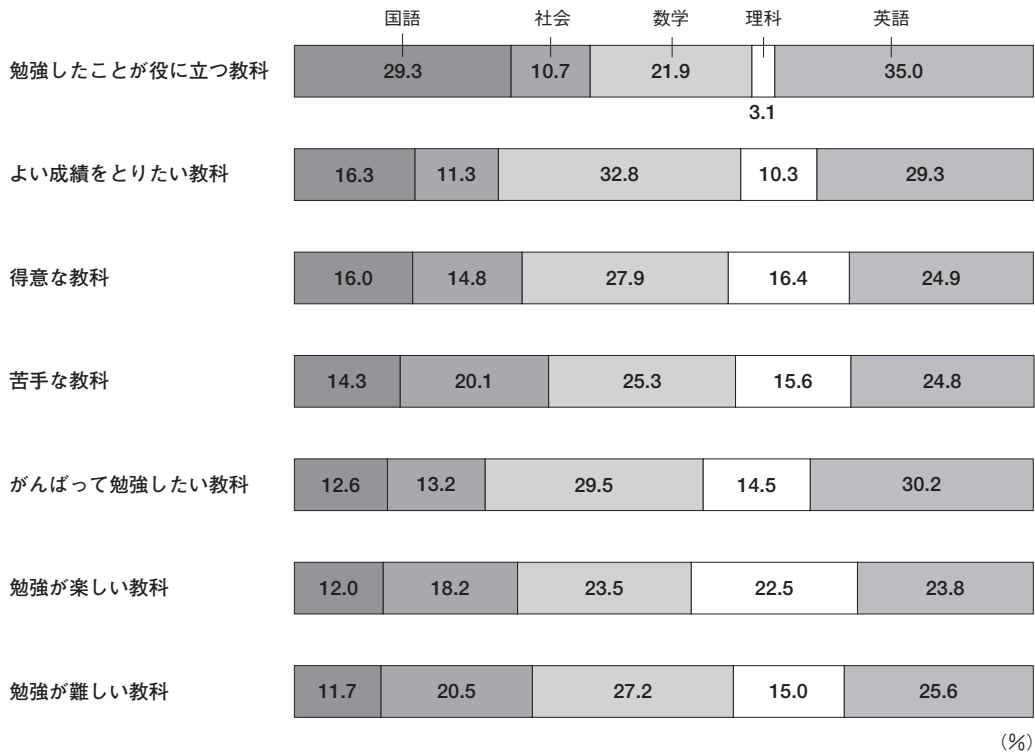
そこで、学年による違いを考慮し、各学年ごとに漢字力別の比較を行った（図3-6-3）。「小さいころ、親がよく本を読んでくれた」「親から本を読むようにすすめられる」「親が家でよく本を読んでいる」など、家の人がよくしていることについては、漢字力が高いグループほど、「そう」（「とてもそう」と「まあそう」の合計）と回答している。一方、学校の取り組みに関しては、低学年で実施率の高い漢字の書き取りや宿題ではなく、中1生、中3生で実施率の高い「先生から本をすすめられる」と回答した中学生が、漢字力の高いグループに多いようだ。

(4) 勉強についての考え

①5教科に対する考え

中学生の約3割が、「勉強したことが役に立つ教科」として国語を選択している。

■図4-1-1 5教科に対する考え



5教科（国語、社会、数学、理科、英語）についてあてはまることをたずねたところ（図4-1-1）、「勉強したことが役に立つ教科」として国語を選択した割合は、約3割であった。これは、同じ質問項目において、英語に次いで選択された割合が高いことを示しているが、それ以外の項目については、国語が選択された割合は、すべて10%台となっている。また、数学、英語と比較すると、「勉強したことが役に立つ教科」以外の項目すべてにおいて、国語は選択された割合が低くなっている。

②国語の得意・不得意

国語が「とても得意」という中学生は、全体の約3%。
「まあ得意」と「あまり得意でない」を合わせると、
全体の約85%を占める。

■図4-2-1 国語の得意・不得意（全体／性別／学年別）

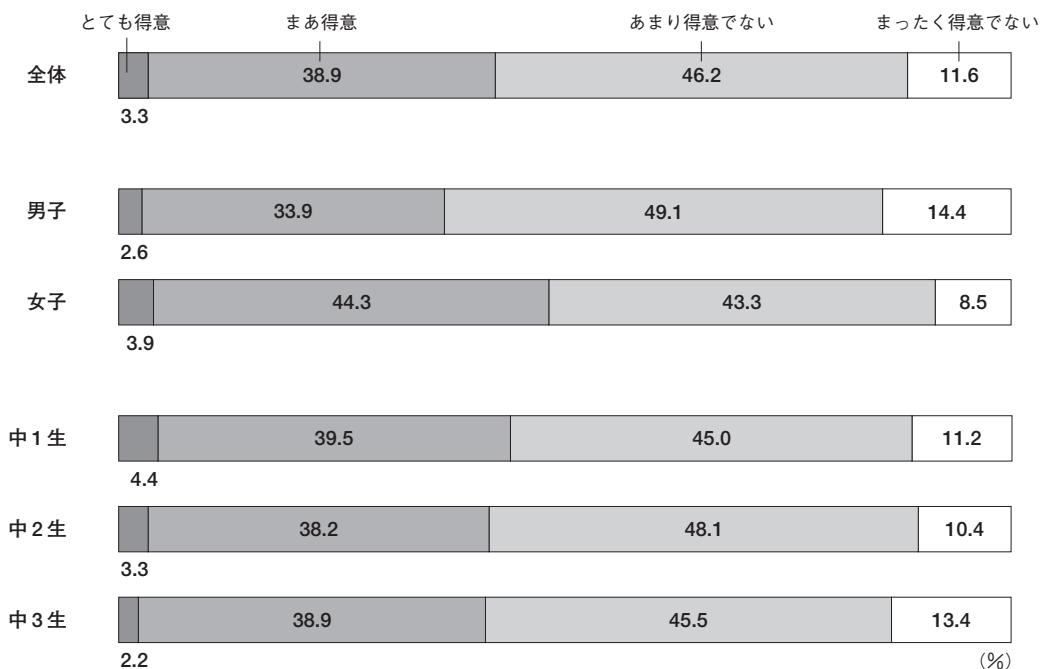
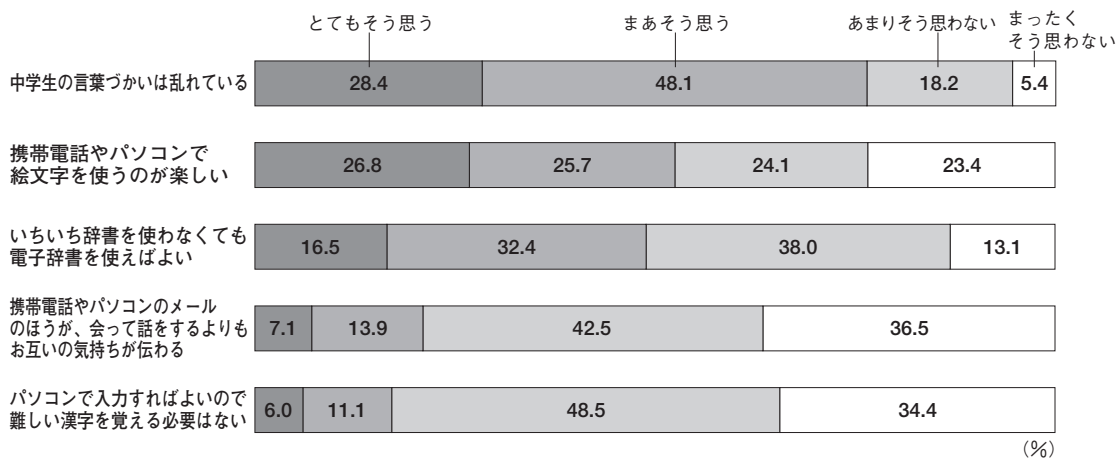


図4-2-1は、国語の得意・不得意についてたずねた質問の回答結果である。これより、まず全体で見ると、「とても得意」の割合が3.3%となっている。一方で、「まあ得意」と「あまり得意でない」の割合の合計は、85.1%となっており、中学生の大半を占めていることがわかる。次に、性別で比較してみると、男子よりも女子で国語が「得意」（「とても得意」と「まあ得意」の合計、以下同様）の割合が高くなっている。さらに、学年別で比較してみると、わずかに低学年の方が「得意」の割合が高くなっている。

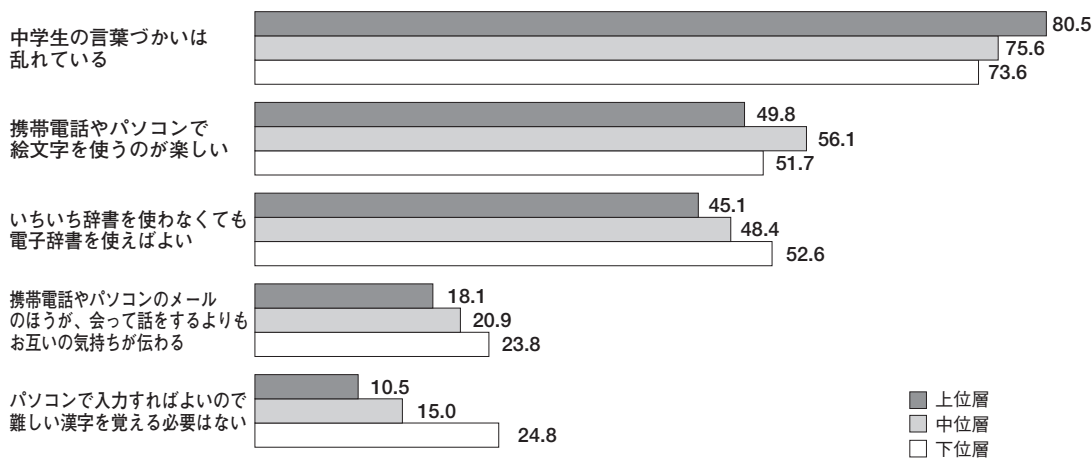
③国語についての考え

**8割近くの中学生は「中学生の言葉づかいは乱れている」と感じている。
また、「難しい漢字を覚える必要はない」は2割未満と少ない。**

■図4-3-1 国語についての考え



■図4-3-2 国語についての考え（漢字力別）



*「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計 (%)

国語に関するさまざまな意見についてどう思うかをたずねた質問結果を、図4-3-1に示した。全体でみると、76.5%の中学生が、「中学生の言葉づかいは乱れている」に「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以下同様）と回答している。また、「携帯電話やパソコンのメールのほうが、会って話をするよりもお互いの気持ちが伝わる」「パソコンで入力すればよいので難しい漢字を覚える必要はない」に対して「そう思う」という回答は、2割前後と低くなっている。次に、漢字力別に集計した結果をみてみよう（図4-3-2）。これより、漢字力上位層ほど「中学生の言葉づかいは乱れている」と考えているのに対し、漢字力下位層ほど「いちいち辞書を使わなくても電子辞書を使えばよい」「携帯電話やパソコンのメールのほうが、会って話をするよりもお互いの気持ちが伝わる」「パソコンで入力すればよいので難しい漢字を覚える必要はない」に「そう思う」と回答している割合が高くなっている。